

山口県立美術館ニュース

天花

第77号

TENGE

平成11年7月1日
発行山口県立美術館



ウーライ「残像」

表紙作品解説

ウーライ

ULAY (Uwe Laysiepen)

1943(昭和18)年～

残像

1996(平成8)年

Cタイプ・プリント 103.0×125.0cm

この作品は、EU十五カ国の旗とEUの旗を写した計十六点のシリーズ「残像」のなかの一点である。いずれも第二次世界大戦の傷跡を生々しく残した数々の建物を背景に撮影された写真作品である。

この作品の背景は、ノイエ・ヴァッヘ(新衛兵詰所)という十九世紀の建物。柱にはベルリン市街戦の際の弾痕がはつきりと見える。イギリス国旗の旗竿を持って歩いている人間も画面右端に写っているのがわかる。しかし奇妙なことに、国旗は通常の色(ポジ像)であるのに、建物も旗を持つ人物もネガ像になっている。

実はこの作品は、イギリス国旗を構成する赤・青・白の補色によって作られた旗を持って歩く人物を撮影したものである。イギリス国旗とよく似た緑・黄・黒の奇妙な旗が振られているのである。今なお戦争の傷跡を残す建物の前で、これらの不思議な色の旗を見る人は、ナシヨナリズムの高揚を叫ぶデモンストレーションであるかと思っただけかもしれない。というのも、いわゆる冷戦構造が崩壊した当時、民族の独立がうたわれて新しい国と民族を代表する旗が誕生するのを、われわれは次々と目の当たりにしていたからである。ひよっとしたら、自分たちの知らないどこかの国と民族がまたも新たに独立し、制定されたばかりの旗をここで振っているのではないか……。資本主義対社会主義という対立の壁が劇的に崩れさったベルリンに翻る新しい旗は、政治的対立構造のかけに隠されていた民族問題の顕在化そのものであるように

に見えたのかもしれないのである。

しかし、この作品は、フィルムを反転して焼き付けたものであるために、補色の国旗は見慣れた国旗に反転し、建物と人物は実体を喪失したかのようなネガ像に変換されている。

こうした制作上の「反転」を知ること、EU十五カ国の旗とEUの旗の背後には、実は、未知の可能性としての新たな国旗が隠されていることを読みとることができる。たとえば、ドイツの黒・赤・黄の三色旗には白・緑・青の旗が、オーストリアの赤と白の旗には緑と黒の旗が潜んでいるのだ。こうした二重性のからくりは、近代国家が内包する民族問題を告発しているとも見ることができよう。それとは逆に、顕在化してきた民族問題は、EUという一元的共同体のなかに反転解消されるべきだとする理想的な方向性が、実はこの作品に表明されているのだと見ることも可能だろう。

いずれにせよ、この「残像」シリーズは、太陽を見て目を閉じると、黒い像がまぶたの裏に残るあの残像現象のように、今まで見えていたものが急に反転されてしまった奇妙な姿をわれわれに見せている。この両面性がさまざまに解釈を喚起してやまないのは、表裏一体となった現実の複雑な様相と、ネガとポジの両面をもつ作品の構造そのものが、寸分の隙もなく合致しているからなのである。

この作品は、一九九七年三月四日から三十一日まで、山口県立美術館で開催された「ウーライ展ーベルリン／残像」に、他のEU各国の国旗およびEUの旗の作品とともに展示された。

ウーライ(本名ウーヴェ・ライジーベン)は、第二次世界大戦さなかの一九四三年、ドイツのゾーリンゲンで生まれた。若いときから写真に興味を持ちはじめた彼は、作品として発表することなど考えないままにセルフ・ポートレイトを撮影していたようである。この頃の彼はいわば実業家として活躍し、ドイツではじめての二十四時間営業のカラープリンター・ラボを経営するなどしている。

一九六八年、それまでの仕事と生活を放擲し、アムステルダムに移住する。その後、ケルンの美術アカデミーに入学し、アヴァンギャルド芸術という概念をはじめで知ったと述懐している。

一九七四年、ギャラリーで写真を用いた作品を発表。誰も自分の名を正確に発音してくれないため、ウーヴェの「ウ」とライジーベンの「ライ」を取り出して「ウーライ」という名を作り、名乗るのもこの年からである。

その翌年、ユーゴスラヴィアのアーティスト、マリナー・アブラモヴィッチと出会い、以来八七年に至るまで世界各地で二人によるパフォーマンスを発表し続ける。こうしてウーライの名前は、アブラモヴィッチとともにパフォーマンス・アーティストとして広く知られるようになった。

一九八八年からは、二人別々に活動を始め、ウーライは再び写真を発表するようになる。九六年にベルリンで大規模な個展を開催し、翌年、当館で個展開催。九年にはカールスルーエの美術大学の教授に就任した。

(斎藤郁夫 当館学芸員)

絵画というジャンルに限って考えれば、山口県では室町時代後期にひとつの画期がある。雪舟の登場である。以後、ほぼ今の山口県域にあたる周防・長門地方では、雪舟の遺風を伝える数多くの画家たちが活動してきた。なかでも特に注目すべきは、萩藩お抱え絵師の系譜「雲谷派」である。名実ともに雪舟流正統を受け継いだこの画派は、本家・分家・弟子家などを含めると優に百名を超える画家たちを輩出した。

彼らの作品は全世界に散在していて、二十年ほど前までは、まとまったかたちで作品を見ることは困難であった。雲谷派という名前は知っていても、具体的イメージを形成するチャンスは、一部の専門家を除いてほとんどない時代が長かった。しかし今、山口県立美術館が少しずつ集めてきた雲谷派の作品で、広い展示室を埋めることが出来るようになった。今回の展示は当館の雲谷派コレクションのうち、屏風絵を中心にして半数ちかくをセレクトして紹介するものである。ここでは、等顔・等益ら近世初期の流派を支えた雲谷宗家の画家たちを中心に、雪舟から幕末に至る伝統、一般に雪舟流といわれるこの流れのおおまかな輪郭を述べてみよう。

雪舟には多くの弟子がいた。後代の資料は数十人におよぶ弟子の名を記し、その中には防長の人も数多く含まれている。一般に永正三年（一五〇六）とされる雪舟の没年以降も、おそらく雪舟の旧居雲谷軒を拠点に彼ら弟子たちの何人かが活動していたと推測されるが、彼らの活動基盤を支えた大内家が天文二十年

（一五五二）に滅ぼされ、山口の大内文化が衰えはじけると、雪舟流の伝統も急速に廃れていった。しかし、偉大な雪舟につらなる伝統は途絶えことなく、新たなパトロンである毛利氏のもとで復活する。雪舟が没して一世紀ちかくのちになる文禄二年（一五九三）、毛利輝元は原治兵衛直治（のちの雲谷等顔）に雲谷軒と山水長巻をさげわたし、雪舟流の正統を嗣ぐよう命じたのである。

原治兵衛こと雲谷等顔はこれをさかのぼる天正十八年（一五九〇）ころ広島府毛利氏に召し抱えられ、慶長五年（一六

特集展示

雲谷派

雪舟の後継者たち

背景：雲谷等顔「楼閣山水図」(部分)

桃山時代の大画構成をも山口の地にもたらした。

父に従って萩に移った等顔の二男等益は、父の作画を手伝いながら画技を磨き、萩城建設や江戸毛利藩邸増築に関わる仕事に父とともに参加した。また、慶長十年の洞春寺萩移転の際には、すでに絵師として本格的活動をはじめていた。等顔の作風に同時代の中央における絵画の動向である平明さを加味し、父とは異なる江戸時代的な作風を完成した。元和四年に等顔が没すると、等益自らが宗家となり、亡兄等屋の長男等益的には別に一家を

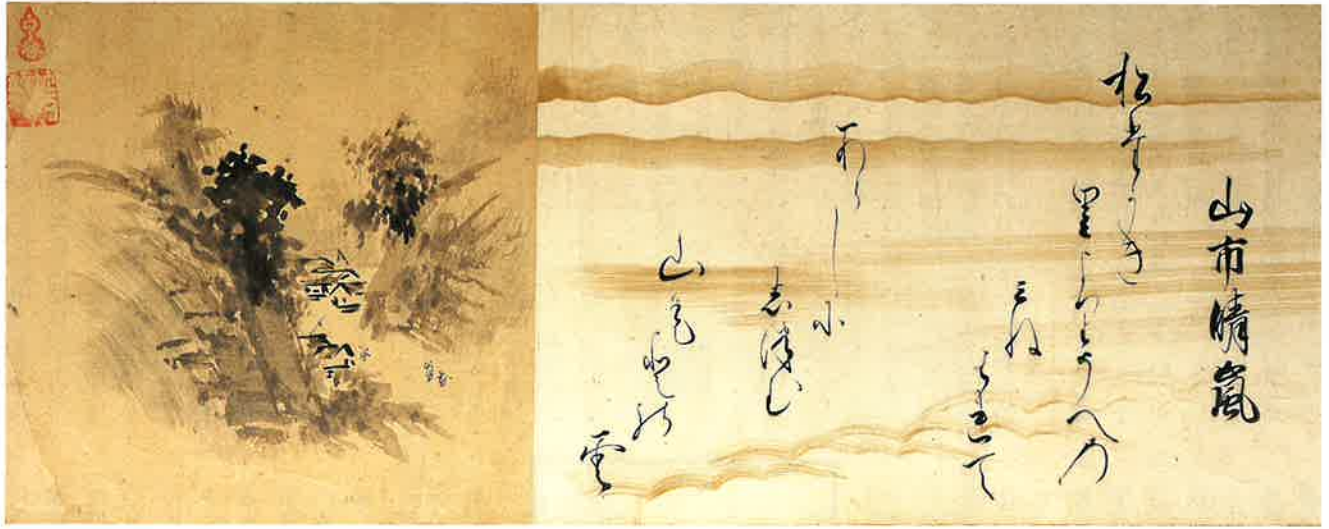
それを基礎とする雲谷派様式の定着に功績があった。雲谷派はその後も世代を重ね、斎藤・二谷・波多野・津森・栗栖・長富など萩藩分藩における雲谷派分家の成立や、一部雲谷家の廃絶など、多少の変遷をへながら幕末まで流派体制を存続していく。

全国的にみても、一地方における狩野派以外の流派による大規模な画家集団成立の例はほとんどなく、その意味で雲谷派は地方画壇として特筆に値する重要なものである。この雲谷派の特殊性の源はやはり雪舟の存在にあると思われる。神格化された雪舟という存在が、雪舟の流れをくむ雲谷派を特別なものとしたのだろう。また雲谷派内部においてもそうした風潮に呼応して雪舟への回帰を意識し、おりにふれて雪舟画を学び続けている。

〇〇）毛利家の防長二国移封にともない、萩に移住した。慶長年間を中心に大徳寺・東福寺といった京都の大寺院で制作し、慶長九年から作事の始まった萩城や、同じ頃萩に移された洞春寺における障壁画揮毫、慶長十三年以前の江戸毛利藩邸での障壁画制作などの精力的な活動は、等顔の絶頂期を画した。等顔は狩野派を学んだ画家であったが、雲谷軒拝領と同時に、わずかに命脈を保っていた防長における雪舟画風の復興を志した。等顔は、狩野派の画技を基礎に雪舟流を加味し、さらに同時代の中央の趣味である

構えさせ、雲谷家を二家とした。等益は百石をこえる高い知行高を父から受け継ぎ、のちに三百石の大知行取りとなつていく。等益はこの社会的な成功を背景に、弟子たちによる雲谷派分家の成立に尽力し、等の弟等宅・等作、そして自らの二男等爾にも一家を成させた。雲谷家は等益没後に一時七家となり、のち六家に落ちつくこととなる。

等益の長男等与を中心に等爾・等の等宅・等作ら雲谷派の第三世代は、みな等益の様式を基礎に作画活動にはげんだが、彼らはおおむね等益の作風を尊重し、



6 雲谷等顔「瀟湘八景図」(部分)



10 雲谷等益「山水人物図」



28 斎藤等室「花鳥図」



16
雲谷等与「鶉図」



26
雲澤等悦「柳蔭野馬図」



雲谷派—雪舟の後継者たち—

■出品目録■

1	雲谷等顔	樓閣山水図	紙本墨画淡彩・六曲屏風一雙	16世紀後期
2	雲谷等顔	群馬図	紙本墨画淡彩・六曲屏風一雙	16世紀後期
3	雲谷等顔	蜆子和尚図	紙本墨画・掛幅	16世紀後期
4	雲谷等顔	懶瓊煨芋図	紙本墨画・掛幅	16世紀後期
5	雲谷等顔	枯木翡翠図	紙本墨画・掛幅	16世紀後期
6	雲谷等顔	瀟湘八景図	紙本墨画・卷子	16世紀後期
7	雲谷等顔	澆墨山水図	紙本墨画・掛幅	16世紀後期
8	雲谷等顔	樓閣山水図	紙本墨画淡彩・六曲屏風一雙	16世紀後期
9	雲谷等顔	瀟湘八景図	紙本墨画淡彩・六曲屏風一雙	16世紀後期
10	雲谷等益	山水人物図	紙本墨画淡彩・六曲屏風一雙	17世紀前半
11	雲谷等益	山水人物花鳥図	紙本墨画／淡彩／着色・押絵貼六曲屏風一雙	17世紀前半
12	雲谷等益	鯉図	紙本墨画淡彩・四曲屏風一隻	17世紀前半
13	雲谷等益	樹下高士山水図	紙本墨画淡彩・掛幅(二幅対)	17世紀前半
14	雲谷等益	山水図	紙本墨画淡彩・襖四面	17世紀前半
15	雲谷等与	群鶴図	紙本金地着色・六曲屏風一雙	17世紀中期頃
16	雲谷等与	鶉図	絹本着色・掛幅	17世紀中期頃
17	雲谷等与	達磨図	紙本墨画淡彩・掛幅	17世紀中期頃
18	雲谷等爾	寒山拾得図	絹本着色・掛幅(双幅)	17世紀中期頃
19	雲谷等哲	花鳥図	絹本着色・掛幅(双幅)	17世紀中期頃
20	雲谷等恕	牡丹図	紙本金地着色・六曲屏風一雙	17世紀後期
21	雲谷等鶴	花鳥図	紙本金地着色・六曲屏風一雙	18世紀前期頃
22	雲谷等竺	鯉図	絹本着色・掛幅(双幅)	18世紀末期頃
23	雲谷等龍	山水図	紙本墨画・掛幅	19世紀中期頃
24	雲谷等起	毛利重就像	絹本着色・掛幅	19世紀後期
25	三谷等宿	白鷹図	紙本着色・掛幅	16世紀末期
26	雲澤等悦	柳蔭野馬図	紙本墨画・掛幅	17世紀前半頃
27	斎藤等順	渡唐天神図	紙本着色・掛幅	16世紀末期
28	斎藤等室	花鳥図	紙本着色・六曲屏風一雙	17世紀中期頃
29		雲谷派粉本	マクリ	19世紀
30		雲谷派粉本模写	画卷	19世紀
31		雲谷派印	印鑑二十三個	17世紀
32		平原宗家略譜	冊子	18世紀

会期 平成十一年六月二十九日～八月一日
 料金 常設展料金に含まれる(十二頁参照)



25 三谷等宿「白鷹図」



22 雲谷等竺「鯉図」双幅のうち



18 雲谷等爾「寒山拾得図」双幅のうち寒山図

西遊記のシルクロード

三蔵法師の道

孫悟空・猪八戒・沙悟浄が三蔵法師を助けて、妖怪たちを退治しながら、天竺へと旅をする。今なお色あせることなく語り継がれる『西遊記』は、実在した三蔵法師・玄奘（げんじょう）のインドへの旅をもとにつくられた物語である。七世紀のはじめ、唐の都長安を出た玄奘は、シルクロードを通って天竺まで三万キロもの道のりを乗り越えて、十七年の歳月をかけて、多数の経典を持ち帰り、翻訳した。三蔵法師の功績は、大量の経典を翻訳した

ということに
どまらず、
一一〇もの国
を渡り歩き、
未知の土地の
風俗や国勢を
明らかにして、
国際交流を押し
進めたこと
にもある。三
蔵法師は国際
交流の先駆者
といっても過
言ではない。この展覧会は、シルクロードを通じ日本に伝わった文化交流の実情を、三蔵法師の人物像や苦難の旅の足跡にからめて約二〇〇点の作品で紹介するものである。

玄奘三蔵の人物像

三蔵法師とは、本来固有名詞ではない。三蔵とは、経典を蔵にたとえて経・仏陀の教えに関するもの、律（戒律に関するもの）、論（仏陀の教えを解釈したもの）の三種類の経典のことで、三蔵法師とは、その三蔵すべてに通じた高僧という意味である。また三蔵法師のことを、訳経三蔵ともいい、インドから経典を將來して翻訳した人のことも指す。三蔵法師といわれる高僧は、何人もいるので、三蔵法師・玄奘のことを玄奘三蔵と言いつぶすことが多い。

玄奘は唐の起こる前、隋時代六〇二年（このほかに六〇〇年説など玄奘に関わる年代には諸説ある）に河南省に生まれる。六一四年に出家、洛陽・長安で師に

をし、砂漠を九死に一生を得る思いで横断して国外に脱出したのである。途中、西域の諸国を渡り歩き、そこで国王に仏教の講義を行ったりもした。そして、国王の歓待を受けたり、援助を受けたりして玄奘はインドを目指した。トウルファンの高昌国では、玄奘の博識に感心した国王に是非この国に留まるよう迫られ、玄奘は断食をしてインド行きの意志に変わらぬことを示したというエピソードもある。



*重文 玄奘三蔵像 鎌倉時代 東京国立博物館蔵

玄奘は、現在の中国・ウズベキスタン・アフガニスタンといった地域を経て、インドへと向かった。そこには、バミヤンのように、玄奘が訪れた当時から寺院や仏像が存在していた

る。六一四年に出家、洛陽・長安で師に恵まれなかった玄奘は成都に行き、六二二年に成都で受戒（仏の戒律を受けること）した。のちに長安に戻って仏教を学ぶうちに、国内の仏教研究に限界を感じ、インドへの留学を決意する。ところが当時の唐では勝手に国外に出ることは禁じられていた。そのような中でも、玄奘のインド留学への熱意は冷めることはなく、ついに六二九年長安をひそかに出て、昼は伏して夜に移動するという難行

場所、戦乱によって今現在破壊が進行し、失われようとしている場所もある。そして、ヒンドゥークシユ山脈を越えて、ガンダーラに入った。それから、マトゥラー、サルナト、ブツガヤーといった仏教の聖地を経て、六三〇年ついに目的地のナーランダール寺にたどり着く。玄奘は、ここでシーラバドラ（戒賢法師）に会って五年間学んだ後、インド各地を巡礼してまわる。この巡礼の際に



*重文 『大唐西域記』(中尊寺経)平安時代 東京国立博物館蔵

は、南インドのアマラーヴァティーや有名なアジャンター石窟寺など、インド仏教美術の中心地となった地域を訪れている。旅を終えた後、再びナーランダー寺へ戻り諸師に学び、六四一年には、当時中インドに勢力を持っていたハルシャヴァルダナ王の礼拝を受け、その援助を得て、インドからの帰国の途につく。無断出国した玄奘は、長安に戻るために滞在先のホータンから皇帝あてに帰国許可を得るための手紙を送り、その許しを得て、六四五年に十七年余りにわたるインド留学の旅を終え、多くの経典や仏像などを携えて、長安に凱旋したのである。

玄奘がインドからもたらしたサンスクリット語の経典は、五二〇夾、六五七部であったという。帰国後から六六四年に亡くなるまで、七十五部一三三三五巻の翻訳を行った。その量は、中国における漢訳経典の翻訳者の中でも群を抜いている。また、訳語の統一をはかり、それ以前の経典よりも、より原文に忠実な翻訳を目指しており、経典翻訳に一大変革をもたらした。それゆえに、玄奘以前の訳を旧訳といい、彼以降の訳を新訳と呼ぶようになった。玄奘が三蔵法師の代名詞ともなったのは、玄奘が中国最大の訳経三蔵(大翻訳家)として大きな功績ののこしたからである。日本でもっともポピュラーなお経『般若心経』も玄奘の訳である。日本の仏教にも玄奘は大きな影響をあたえている。特に奈良の興福寺・薬師寺を中心とした法相宗の祖師として、絵画化されている。

さて、帰国した玄奘に会見した時の皇帝太宗は、大唐帝国の勢力拡大のため、

西域の情報を詳しく知る玄奘に、還俗して自分の補佐をするよう迫った。玄奘は経典の翻訳に専念したいとして、これを辞退した。そこで、太宗は諸国の情報を一冊の本にまとめるよう、玄奘に命じた。これに応じて、弟子の弁機が玄奘から渡された旅行誌をもとに編集してつくられたのが、かの『大唐西域記』なのである。これには、玄奘が行った国だけでなく、実際には行かなかった国についても記されており、国名、都城の様子、物産、住民の気質、宗教状況などが詳しく書かれている。

『大唐西域記』は、日本でも奈良時代以来、書写されており、後世に多大な影響を与えている。それはこの書物がインド・西域に関する貴重な情報源だったからである。『大唐西域記』は『西域記』といいつつ、中央アジア以上にインド地域の記述が多い。天竺(インド)は、かつて、中国・韓国・日本からみれば、そこは、極楽浄土と同じ遙か彼方の彼岸の世界だった(二十年前大ヒットしたテレビドラマ『西遊記』の主題歌「ガンダーラ」もそのような歌詞だった)。後世、玄奘が伝説化されたのは、かの天竺へ行ってその見聞を記録したからである。

『大唐西域記』は、記述も正確で、今日でも考古学や東洋学にとって、欠くことの出来ない文献で、古代インドや中央アジアの状況を知る上でのもっとも重要な資料である。十九世紀のシルクロード探検家、A・スタインは『大唐西域記』の英訳本を手もとから離すことはなかったという。

そして、『大唐西域記』によるシルク

ロードやインド見聞の記録と、経典将来の功績が伝説化され、のちに『西遊記』の物語が生まれてくるのである。

以上のように、玄奘の生涯を通観してみると、次のような人物像が見えてくるだろう。身の危険をおかしてまでもインドへ行き仏教を学びたいという宗教的情熱を持ち、気の遠くなるような量の翻訳作業に亡くなるまで心血を注いだ玄奘は、情熱的な宗教家である。そして、インド行きを成功させるための意志と行動力を持った実践家であり、旅先における緻密な情報収集力に長けた情報収集家でもある。また、インドへの行き帰りのには滞在先の支配者と巧みに交友を持ち、その援助を引き出す手段にも長けており、目的の達成のために現実の情勢を冷静に見つめ実現させていく現実主義者でもある。このような側面を持っていたので、玄奘は、国際交流の先駆者として、輝かしい功績ののこすことができたのである。

「アジアの世紀」といわれる二十一世紀を目前にした今、七世紀に生きたスーパーマン三蔵法師・玄奘の遺産を通じて、地球市民の時代の新たな国際交流のあり方や、混迷している価値観への示唆など、時代への指針を探り、若い世代へのメッセージを託したのが、本展覧会である。

展示構成は、五つのコーナーからなる。それぞれに、インド・中央アジア・中国・日本の名品が出品され、写真資料や映像を用いて、多角的な展示空間を演出する。



仏頭 マトゥラー 5～6世紀 マトゥラー博物館



仏陀と執金剛神 ガンダーラ 2世紀
ベルリン国立インド美術館蔵



ヤクシャ像 アヒチャトラー 2世紀 ニューデリー国立博物館蔵



子供を抱く母親 マトゥラー 2～3世紀
ベルリン国立インド美術館蔵

1章 三蔵法師の足跡をたどって

三蔵法師はどのような場所を旅したのだろうか。近年中国、中央アジア、インドに派遣した学術調査団の報告とともに、そのルート上で発見された美術品を展視し「三蔵法師の道」の謎に迫る。かつてシルクロード探検の先駆者たちが発掘し、ヨーロッパの博物館にもたらされた西域美術の数々が一堂に会する。

2章 三蔵法師のめざした聖地インド

三蔵法師がめざした聖地「インド」はどのような場所だったのか。三蔵法師のいた時代のインドは、仏教に変わってヒンドゥー教が勢力を増しつつあったが、一方で、彼が留学したナーランダー寺を中心に、仏教が最後の繁栄をみようとす

る、その直前の時期だった。
2章は、玄奘が巡礼した聖地にあった仏像や神々の像を中心に紹介する。中でもインドからは四十六点の第一級の仏教美術品が展示され、今回の展示の見どころの一つである。

3章 三蔵法師と大唐王朝の華

三蔵法師の故郷、唐の都は、当時どのような様子だったのか。三蔵法師が帰国した七世紀半ば。時代は大唐王朝の勃興期であった。東西交流も盛んで、異国情緒あふれる美術が花開く。正倉院宝物の源流ともなる大唐王朝の華を、名品の数々で紹介する。

4章 長安から奈良へ

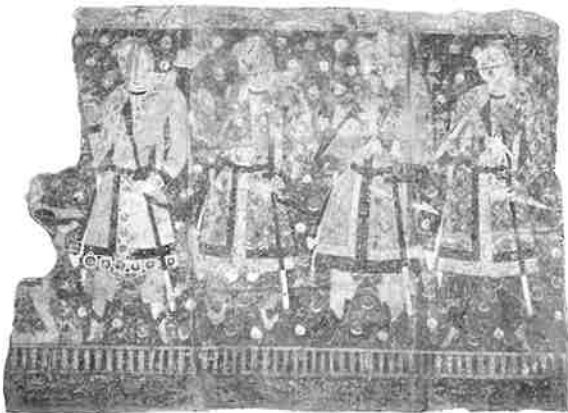
遣唐使が伝えた仏教美術
三蔵法師は、どのように日本の仏教文



十一面観音立像 トウルファン 7~8世紀
ベルリン国立インド美術館



仏三尊像 アヒチャトラー 2~3世紀 マトゥラー博物館蔵



寄進者像 キジル将来 7世紀 ベルリン国立インド美術館



花網を担ぐヤクシャ アマラーヴァティー 2世紀
アマラーヴァティ考古博物館蔵

化に影響を与えたのだろう。三蔵法師がもたらした経典や、当時の中国の文物は、遣唐使らによって日本に伝えられた。ここでは中国から日本へと伝えられた文化交流の過程と、三蔵法師が日本でのようにとらえられ美術などに表されてきたかを検証する。玄奘が翻訳した『大般若経』の守護神十六善神像の画像には、玄奘三蔵の姿があり、玄奘の伝記『大唐慈恩寺三蔵法師伝』は、絵画化され、絵巻「玄奘三蔵絵」として伝えられている。

5章 伝説の中の三蔵法師・西遊記の世界
『西遊記』の物語は、どのようにして誕生し、どのように語り継がれてきたか。三蔵法師は、苦難の旅と偉大な功績から、次第に伝説化されていくことになる。『西遊記』は、一人の著者による創作ではなく、三蔵法師の伝説が長い時間をかけて出来た物語なのである。ここでは、三蔵法師が伝説化され、『西遊記』となっていく過程を検証する。そして、近年のアニメやテレビドラマに至るまで、三蔵法師イメージの変遷をたどる。

展示会場は、三蔵法師の悠久の旅になぞらえ、道と道を結ぶ形で構成し、映像や光、音なども効果的に取り入れ、子供から大人まで楽しめる展示になる。

(岩井共一 当館学芸員)



ハヌマーン「乳海攪拌」(拓本)
アンコールワット拓本保存会事務局蔵



*国宝 慈恩大師像 平安時代 薬師寺蔵



テレビドラマ「西遊記」 ©国際放映



*国宝 玄奘三蔵絵 鎌倉時代 藤田美術館蔵

西遊記のシルクロード 三蔵法師の道
主催 山口県立美術館、朝日新聞社、
山口朝日放送
会期 平成十一年八月二十日
〜十月十一日
休館日 毎週月曜
ただし十月十一日は開館
料金 一般 一〇〇〇(八〇〇)円
学生 八〇〇(五〇〇)円
*十八歳以下は無料
()内は二十名以上の団体料金

学芸員によるギャラリートツアー
毎週日曜日(八月二十二日は除く)
午後一時三十分より

講演会

八月二十二日(日)
「インドと中国を結んだ三蔵法師」
講師 宮治 昭(名古屋大学教授)
午後一時三十分より美術館講座室にて

*印のついている作品は、作品保護のため、展示期間を限らせていただきますので、ご了承下さい。

美術館から

平成十一年度の常設展

企画展示室

雲谷派展

六月二十九日～八月一日

*三～六頁参照

平成十一年度の特別展

大ザビエル展

―その生涯と南蛮文化の遺産―

四月六日～五月三十日

第三十四回現代工芸美術中国会展

六月十五日～六月二十日

三蔵法師の道―西遊記のシルクロード―

八月二十日～十月十一日

*七～十一頁参照

第五十三回山口県美術展覧会

十一月四日～十一月二十一日

第五十二回山口県学校美術展覧会

十二月八日～十二月十二日

宮崎進の世界―もうひとつのシベリア―

十二月二十一日～一月三十日

山口県立大学卒業制作展

二月三日～二月六日

山口大学卒業制作展

二月十日～二月十三日

山口芸術短期大学卒業制作展

二月十七日～二月二十日

ヨーク・ガイスマール展

二月二十九日～三月二十六日

第一常設展示室

●絵画展示室(香月泰男室)

シベリア・シリーズ(一)

六月八日～八月八日

シベリア・シリーズ(二)

十月十九日～十二月二十六日

シベリア・シリーズ(三)

一月四日～四月二日(予定)

●絵画展示室(小林和作室)

中本達也の世界

六月八日～八月八日

松田正平の世界

十月十九日～十二月二十六日

小林和作の世界

一月四日～四月二日(予定)

●郷土工芸室

三輪休和展

六月八日～八月八日

現代の萩焼

十月十九日～十二月二十六日

萩の置物

一月四日～四月二日(予定)

●資料展示室

中本達也の世界

六月八日～八月八日

松田正平の世界

十月十九日～十二月二十六日

島山直哉展

一月四日～二月十三日

福田勝治展

二月十五日～四月二日(予定)

第二常設展示室

下瀬信雄「萩の日々」

六月八日～八月八日

日本画の四〇〇年

二月八日～二月二十日

*展覧会の名称、内容および期日は予告なく変更する場合があります。

■平成十一年度上級実技講座

洋画(前期)七月二十一日～二十三日、

後期)七月二十四日～二十六日)

講師||富永恒光(洋画家)

写真(七月二十七日～二十九日)

講師||下瀬信雄(写真家)

色彩の造形(七月三十日～八月一日)

講師||荒瀬景敏(造形作家)

*官製の往復葉書にて七月二日(当日消

印有効)までにお申し込みください。

申し込み多数の場合は抽選となります。

申し込みおよび詳細に関する問い合わせは美術館普及課まで。

■料金

◎特別展

別途に定めた料金

◎常設展

一般一九〇(二六〇)円

学生二二〇(二〇〇)円

(一)内は二十名以上の団体割引料金

*七十歳以上と十八歳以下、および高校生、盲・聾・養護学校生は無料。

■開館時間

午前九時～午後五時

(入館は午後四時三十分まで)

■休館日

月曜日(月曜日が祝日もしくは振替休日の場合は翌日休館)と年末年始(十二月二十八日～一月三日)

*五月三十一日～六月七日、八月九日～八月十九日、十月十二日～十月十九日は展覧会準備等のため、臨時休館いたします。そのほか、施設・設備の保守点検、展示替え等での臨時休館にご留意ください。

■美術館案内

NTTハローダイヤル(〇八三九―二三八六〇〇)をご利用ください。

山口県立美術館二ユース

「天花」 第七十七号

平成十一年七月一日発行

発行 山口県立美術館

〒753-0089 山口市亀山町三、一

TEL 〇八三九・二五・七七七八

FAX 〇八三九・二五・七七九〇

印刷 瞬報社写真印刷株式会社